



○ 裁判所の所長さんとの対談 1
 第三回特別企画展 2
 「森鷗外展 せりせりの微笑」
 ○ 平野啓一郎さん講演会「鷗外の「知」」
 ○ 文学講座
 ○ 文学ツアー「森鷗外のふるさと・津和野を訪ねる」
 ○ 古川薫さん講演会 4
 乃木希典「斜陽に立つ」をめぐって
 ○ 高橋睦郎さん講演会 5
 「五足の靴」と与謝野寛
 ○ 企画展「みんなおいでよボエムの国へ 6
 —現代少年少女詩・童謡詩展—
 ○ 青木裕子さん朗読会「クリスマス・キャロル」

○ 企画展「ノラともならず 6
 創作人形とよむ杉田久女の俳句」
 ○ 自分史ギャラリー「門司発沖繩行き D51 列車発車」
 ○ 交流ステージ&ワークステーション 7
 「横山莊子ども俳句大会作品展」
 「北九州市立文学館 開館一周年祝賀
 北九州川柳大会作品展」
 子ども文化ふれあいフェスタ
 「落語っこ 落語であそぼう」
 ○ 第18回北九州市自分史文学賞決まる 8
 ○ 第1回北九州文学協会文学賞決まる
 ○ 予告
 ○ 文学館文庫の出版
 ○ 資料寄贈者・受贈雑誌一覧

裁判所の所長さんとの対談

館長 佐木 隆三

文学館の館長として、いろんな方と対談をしてきた。対談といっても、「自分史を語ろう」のように、インタビュー形式のものもある。芥川賞作家の高樹のぶ子さんや、直木賞作家の古川薫さんからは、「一人でしゃべるのは苦手なので、適当に話を引き出してほしい」と言われて、対談形式にした。同業者の相手をつとめるのだから、事前に打ち合わせることもなく、ぶっつけ本番で役目を果たしている。

ちよつと戸惑ったのは、福岡地方裁判所の養田孝行前所長との対談だった。

わたしは昨年八月、福岡地方裁判所委員会の委員に任命され、養田さんとは面識がある。ざつくばらんな人柄だが、なにしろ裁判所の所長さんだから、こちらが身構えてしまう。その対談は、「福岡地裁広報」一月号に、新春特別企画として掲載されるとのこと、十二月十三日に訪ねてこられた。

わたしは知らなかったが、だいたい前に養田さんは文学館に来て、半日がかりで館内を回られたという。それで対談の冒



頭に、「北九州市は、明治維新後の日本を牽引してきた重工業の拠点として、重要な役割を担いました。同時に森鷗外、林芙美子、松本清張などの文学者たちが暮らし、多くの優れた文学が生まれた街ですね」と発言された。

それで嬉しくなって、わたしの緊張は解け、門司港の山小屋で暮らし、畑仕事をしていることなども話した。すると思いがけず、「自然の中で自分も生きています、そして生かされているという感じなんです。アメリカの哲学者・作家で『森の生活』ウオールデン』を書いたH.D. ソローを思い出しました」と言われた。これは困ったぞと思ったのは、わたしは作品も作者名も知らない。やはり裁判所の所長さんともなれば、相当な教養人であることに思いを致した。

それから犯罪や裁判の話題になり、養田さんはずっと民事が専門で、刑事事件は縁がないとのこと。こっちは刑事が専門の「裁判傍聴業」

▲ 第四回特別企画展 「与謝野寛・晶子展」

今年、歌人・与謝野晶子は生誕一三〇周年を迎えます。これを記念し、日本の近代詩歌史上に不朽の足跡を残し、女性の地位向上にも重要な役割を果たした晶子の業績を夫・寛（鉄幹）とともに展望します。また、若松をはじめ、九州各地での夫妻の足跡を紹介いたします。

*日時 4月19日(土) 6月8日(日) ※月曜日休館 (ただし5月5日は開館、7日は休館)
 *観覧料 一般四〇〇円、中学生二〇〇円、小学生一〇〇円

だから、気をとりなおして取材経験について語り、来るべき裁判員制度に話題が発展した。対談の楽しみは、相手からいろんなことを教えられるところにある。そういう次第であるから、これからも懲りずに対談をするつもりだ。

▲ 第三回特別企画展

「森鷗外展 ほとほとの微笑」

10月5日(金)～11月4日(日)



明治時代、陸軍第十二師団の軍医部長として小倉へ赴任した森鷗外の足跡をたどる展覧会を行いました。

また、小倉滞在中に再婚した妻・しげとの間に作られた新しい〈家庭〉の姿も紹介。

「微笑みの人・鷗外」のあたたかな側面に親しんでいただきました。

展示資料約一五〇点
入場者数二二二四人(イベント含む)

+++++
平野啓一郎さん講演会
「鷗外の『知』」
9月25日(火)
+++++

展覧会のプレイベントとして、北九州育ちの芥川賞作家・平野啓一郎さんの講演会を行いました。作家デビューの当初から、森鷗外への敬意を語ってこられた平野さん。自らの読書体験から、鷗外の光と影まで、物静かな雰囲気でお話くださいました。その後の反響も大きく、再度の講演を期待する声も多く寄せ

られています。

ある問題が起こる。それに關して鷗外は— 眞実を知る、眞実を語る者として議論に参加するのではない、今仮にこういう説がある、かりそめにこの説に従って説くけれども、それを説く者を「師」として崇め、ついていくわけではない— ということを言っています。

人間は知識や、世間で言われていることやなんか、そういう風に接すべきだと、鷗外はだんだん感じるようになったのです。

とある知識を盲信すると、人はそれに従って生きさせられる。これは非常に大きな危険につながる、彼はそう感じ始めます。

今、これを面白いと思つて読んでいるから、その説を採用するが、そうでなくなれば別の説を採用してもいい。そういう態度で議論をするようになりなす。

一見、無責任な態度に見える。しかし、鷗外が亡くなつて後、日本は急速に軍事国家としての道を歩み出しました。ある

一つの価値を絶対として信じよ、という教育が行われていくわけです。そのような危険が生じたときに、鷗外の態度— 知識にはいつの時代も流行り廃りがある、それはたった一つの絶対的な權威ではない— は、別な考え方という「自由」を人に許します。

鷗外の中で「眞実」などというものはない。「眞実」はいつも論争の中で決定される。しかも、論争にどちらが勝つかは、その時の力関係による。まさしく、政治的な駆け引きの中でさまざまなことが決まっていくのだと、当時の権力の中枢でしみじみと身に浸みて感じるわけです。

鷗外は最終的に、いかなる官権、勲章、叙勲もいらぬ、石見の人森林太郎として死にたい、と遺書に残します。墓には「森林太郎」以外の文字は彫つてくれない、との遺言を残します。これはどういう意味かと、昔から議論的になつてきました。

江戸幕府には、不完全ながら一種の連邦制、アメリカ合衆国のような統治システムがありました。地方自治が各藩の藩主にかなり認められている。従つて、

藩を越えれば決まりが全然違つている。ある意味、地方分権的なことが江戸幕府では行われていました。

ところが、明治になつて富国強兵を進めるため、非常に強力な中央集権国家が目指されます。東京が権力の極点となる。(東京) 対(地方のその他大勢) という図式です。鷗外は、そのまさに「地方」から十歳で権力の中心・東京に移動してきます。

「鷗外の『知』」ということが今回のタイトルで、僕が語つていることですが、鷗外が藩校時代に学んだのは、いわゆる「教養」です。中国の古典のこういうことを知っている、あるいは、日本の古典文学にこういう話がある。そういった「教養」を身につけたわけです。これは最新の知識と異なり、政治権力と即座に結びついて議論される性質のものではありません。

今の学説では、この病気が細菌のために起こると言われても、次の世代では、いやビタミンCの欠乏のためだった、となる。

知識が常に流動的なんです。鷗外が東京に来てから身につけ



平野啓一郎さん

た知識は、いつもそうした流動的なものでした。しかも、その流動性は真実かどうかという点とより、時の政治権力の綱引きで決定されてしまう。

それに対して、津和野で学んだ、いわゆる古典的な知識は、政治権力と直接には結びつかない場のものでした。

権力の中核にいて、「知」というものの中に巻き込まれた彼自身にも、功罪がありました。

彼のおかげで日本語はかなり進歩しました。しかしまた、彼のおかげで日露戦争の時のよう

に、困ったことにもなった。最新の、石見の国に帰りたい、という心情は、死を迎えた鷗外が、そういった場から身を引こうとしたことの表れではないかと思うのです。

彼は、死が、あらゆる官権、権力の及ばない重大事、すべてを打ち切る重大事である、と言います。どのような権力が関わ

り、どのように議論しようとも、死はそれらすべてを拒む絶対的な事件である、と言っています。

知ること学ぶこと、それを周りに伝えること——それらが政治権力と結びつく世界から身を引き、かつて生まれ育った石見の国へ帰って、一人の森林太郎として死にたい。死を迎えるにあたり、そう語ったのではないか。

晩年の鷗外が願った、石見へ帰ること、石見の人として死ぬことの一つの意味を、僕はそのように考えています。

(二部抄)

北九州芸術劇場小劇場
参加者〓約一七〇人



山崎一穎さん

- ++++++
文学講座
10月5日(金)〜11月3日(土)
++++++
- 監修の山崎一穎氏をはじめ、文学研究者による連続講座を行いました。さまざまな角度から、森鷗外の魅力をお話しいただきました。
- 山崎一穎氏 (森鷗外記念会会長・前跡見学園女子大学学長)
「鷗外に於ける小倉」
 - 清水孝純氏 (九州大学名誉教授)
「鷗外 そのポリフォニー的熟成——小倉時代の言説を中心に——」
 - 中野新治氏 (梅光学院大学学長)
「森鷗外 あるいは『冬の王』」
 - 佐藤泰正氏 (元梅光学院大学学長)
「鷗外と漱石 一面」
 - 荘魯迅氏 (シンガポールソングライター・和光大学非常勤講師)
「鷗外の漢詩をよむ」
- 受講者〓各回約四〇〇人

++++++
文学ツアー
「森鷗外のふるさと・津和野を訪ねる」
10月10日(水)
++++++

北九州森鷗外記念会の協力を得て、鷗外の生地・津和野で文学散歩を行いました。旧宅の見学をはじめ、城下町散策など、秋の津和野を満喫しました。



森鷗外記念館にて

- 同行解説
養父克彦氏
(北九州森鷗外記念会理事)
 - 行程
小倉駅→森鷗外記念館・森鷗外旧宅→西周旧居→昼食→殿町散策→安野光雅美術館→乙女峠・永明寺→小倉駅
- 参加者〓約四〇〇人

++++++ 来館者の声 ++++++

- ◇ 森鷗外展を親に久しぶりに小倉へ来ました。
(二十代 女性)
 - ◇ 森鷗外のイメージが変わりました。よき父親としての一面に親近感がわきました。今度小説を読む時は、少し感じ方が違うかもしれません。
(五十代 女性)
 - ◇ 初めて見る写真もあり、さすがに鷗外の住んだ小倉の地だと思いました。
(六十代 女性)
 - ◇ 平野啓一郎氏の講演を聞き、鷗外の人となりをもっと学べたので、企画展もとても興味深く見ることができました。
(六十代 女性)
 - ◇ 文学だけでなくさまざまな面からの活躍を知りました。
(四十代 女性)
- このほか、たくさんのご意見を頂きました。ありがとうございました。

▲北九州市立文学館 開館一周年記念

古川薫さん講演会

乃木希典「斜陽に立つ」をめぐって

11月11日(日)



古川薫さんと佐木館長

開館一周年を記念して、下関市在住の直木賞作家・古川薫さんをお招きして講演会を開催。毎日新聞日曜版に連載中であった「斜陽に立つ」についてお話しいただきました。聞き手は館長・佐木隆三。

佐木 作品を書くきっかけは。

古川 私は山口の生まれで乃木さんには子どもの頃から親しんできましたが、司馬遼太郎の「殉死」という作品で「乃

木愚将論」が日本に浸透しています。司馬史観そのものに反論はしないが、乃木さんについて書かれたことは違うと言いたい。乃木さんがかわいそうだというのが動機ですね。

佐木 六本木ヒルズから始まったのに意表をつかれました。

古川 上京して乃木さんの生地に行ったら六本木ヒルズで、近未来都市のようになってい

る。なんとここで生まれたか、面白い、書き出しはこれだと思いましたね。

佐木 なぜ「斜陽に立つ」という題になったのでしょうか。

古川 乃木さんは漢詩を多く作っていて、「金州城外作」という有名な詩の一節が「金州城外斜陽に立つ」。二人の息子を前線

で戦わせたため、まず長男が戦死し、次に次男が戦死した所が金州城。しかしこの詩は息子だけの鎮魂ではなく、そこで死んだ四千五百人の日本兵とともに悼んだので

す。夕陽が差す金州城で乃木さんが直立不動の姿勢で立って、寂しげな、しかし軍人としては毅然としたイメージがあつて、「斜陽に立つ」としました。乃木さんがあつて、「愁い顔の軍神」だと思えます。

佐木 司馬さんは吉田松陰や乃木希典など長州人を悪く言うのはなぜでしょう。彼は大阪の人ですよ。

古川 関西とは資質が違うのでは。兵隊の時、私達の班は大阪人と長州人が半々で、水と油でした。それに司馬さんが長州人について間違つた事を書くと、山口の人は抗議の手紙を送るらしい。そういう事が重なり、乃木をはたき落と

してやれと思つたんでしょうか。実際に司馬さんは「長州人が嫌いです」とおっしゃつた。長州人の目の前でよく言うなど思いました。それが顔に表れたんでしょう。司馬さんが言うには、なぜ僕が長州人を嫌いかと言うと、まず日本の陸軍は山縣有朋という長州人が作ったようなもので、日本人の杜丁はほとんど陸軍

に入つたのだから、日本人は陸軍を通じて長州人の血を流しこまれていると。だから私自身も合めて、日本人批判のつもりで長州人を批判するんですと。うまいと言いますよ。恐れ入りましたが、待てよ、ごまかされたぞと。詭弁なんですよ。司馬さんはソクラテスも願ひのソフィスト、詭弁の大家です。稀代の才能ですね。

佐木 この小説はこの先どうなるのか、会場にいる方だけに教えて下さいませんか。

古川 司馬さんの場合、乃木が愚将だったから旅順を落とせず、兒玉源太郎という將軍が鞍馬天狗のように現れて落ちたという結論です。しかし兒玉もそんなに優れた軍人だったのではなく、東北方面から伊地知參謀長が攻めて旅順が落ちたわけです。最後としてふさわしいと思つたのでラストシーン

は自決にしました。以前小倉の方が、乃木將軍は奥さんを殺したと「殉死」で読んだと言っています。改めて読むと、嫌だと言つて奥さんに

一緒に死ねと言つて殺したよいうな書き方になってい

るから大丈夫と言つたそうです。乃木さんは日本の精神文化を世界に知らしめたと言

えます。

▲高橋陸郎さん講演会

「五足の靴」と与謝野寛

10月21日(日)

与謝野寛(鉄幹)らが九州を旅して書いた紀行文「五足の靴」が発表されて百年になるのを記念して、本市出身の詩人で、与謝野寛の詩業に詳しい高橋陸郎さんをお招きして講演会を開催しました。高橋さんと交流の深い詩人・伊藤比呂美さんも熊本から飛び入り参加。「五足の靴」や寛が文学史に与えた意義について、寛・晶子の詩や短歌の朗読を交えながらお話ししていただきました。なお、本講演会は、熊本近代文学館のご協力により実現しました。

高橋 「五足の靴」は、与謝野寛が、主宰していた雑誌「明星」同人の北原白秋、太田正雄(木下木太郎)、平野萬里、吉井勇を連れて、「五人づれ」として書いたものです。九州を旅行して、その旅行記が当時の「東京二六新聞」に連載されます。これはわが国近代

文学史上の一大事件ということになっていきます。なぜかというところ、これだけ一緒になつて一ヶ月の旅をしたにも関わらず、寛に率いられた四人がその年のうちに「明星」を脱退します。その直後に、白秋は「邪宗門」「思ひ出」という代表的な詩集を出し、空太郎や勇も詩人として知られるようになり、背かれた与謝野寛という人も、背かれてどん底の気分を味わうんですが、「相聞」という素晴らしい歌集を出します。それから、このあとにわが国初の芸術運動と言える「パンの会」が始まります。そういうわけで、「五足の靴」があつて、その決裂により日本の詩歌文学が爆発するわけです。

伊藤 パンの会の影響について詳しく教えて下さい。
高橋 白秋の「思ひ出」はそこから生まれたと僕は思っています。こ



高橋陸郎さんと伊藤比呂美さん

の旅で長崎や天草を訪れ、キリシタン文化に触れたことから、白秋や空太郎の南蛮文学が開花します。そして空太郎が東京で白秋のために開いたのがパンの会だと僕は見ているわけです。なぜかというところ、その会場が全部大川(隅田川)のほとりなんです。つまりそこで柳川がもう一遍復活するわけです。白秋は自分の柳川を思い出して、総括して、ああいうものができるといふところ、寛が背かれた理由ですが、彼はそれなりに主宰者風吹かせるようなこともあつたんじゃないかと。明治の青年たちは徹岸不遜ですから、耐えられないという思いがあつた。それから「五足の靴」の旅で大隈・薩摩に行かなかつたのは、子供の頃寛はそこで過ごしてますから、行って色々、我慢されたくないというところがあつた

かもしれない。結局彼は背かれるんですが、背かれる事は指導者の大事な要素だと思ふんです。そうじゃないと後に続く人は皆先生より下のまま終わるでしょう。背かれてこそ初めて先生を超える事ができ、あるいは違うところに行く事ができる。だから背いた人達が大きくなるのであれば指導者として非常に優れている。かつ、寛は背かれた中からいい作品を生み、大きな存在になつていく。落魄の思ひの中から成長するんです。それまでのただの勢いのいいものに苦味が加わつて深みを増すんですね。結局、この旅行自体が必然的な運動であつたし、その決裂も必然的なものであつたなという気がしますね。

寛はこの時の事を歌にしています。
わが雛はみな鳥となり飛び去らんぬうつろの籠のさびしきかなや
才高く歌もて我をおどろかす惜しき二三子あやまちをせよ
出て行つた二、三の才能のある若い人達よ、君達はこれから色々挫折をしないといふ。過ちをしないといふ大きな力がないよという励ましでもあるんですね。この人の全集や詩集は世に出ていなくて、少なくとも彼の歌集は出さなくてはいけないと思います。
それから晶子の奔放な性質を見出して育てたのは寛だと思ふんですね。晶子は追悼の歌では手放して寛のことをほめていきます。やはり魅力ある人だつたんでしょう。
伊藤 晶子は寛の影響を受けたけれども、寛も晶子の影響で書くものが変わったのでは。
高橋 初期の寛の作品は、「虎剣流」「ますらをぶり」と呼ばれる作風で、ただただ勇ましい。それが非常に細やかになつて、苦味を帯びてくる。晶子の影響もあるし、環境もありますね。自分が発見した人を育てて、育てる中から自分が逆に影響を受けて大きくなるというのはほんとに才能ですね。

参加者約二〇〇人

▲交流ステージ&
ワークステーション

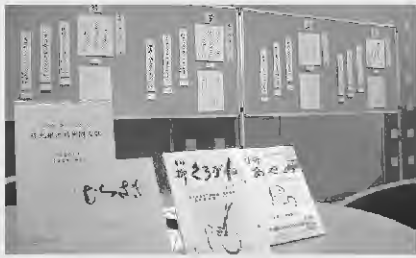
「榎山荘子ども俳句大会
作品展」
11月16日(金)～12月27日(木)

第三回榎山荘子ども俳句大会の特別賞、入選作の四十五点などを、色紙、短冊にして展示しました。「朝顔のつるをのぼって雲の上」(杉田愛瑞美さん 吉木小六年)、「炎昼で途方に暮れる金閣寺」(杉野享洸さん 引野中三年)など、子どもたちの詩情豊かな作品が文学館を彩りました。



+++++
「北九州市立文学館
開館一周年祝賀
北九州川柳大会作品展」
1月4日(金)～1月31日(木)
+++++

平成19年12月16日、北九州川柳作家連盟主催による「北九州市立文学館開館一周年祝賀 北九州川柳大会」が行われ、その作品展が文学館で開催されました。「祝」「文」「学」「館」「二」「周」「年」を課題に投句された作品から秀句、佳句二十八点を展示。「笑わせて泣かせている祝辞」(下田三休さん)、「文豪の升目鎌骨のペンの跡」(大場可公さん)など来館者の関心を集めていました。



+++++
子ども文化ふれあいフェスタ
「落語ついで 落語とあそぼう」
9月29日(土)
+++++

山椒家小粒さんら「断の会じゆげむ 小倉出張所」の皆さんをお招きして、小・中学生を対象とした落語の体験講座を開催しました。

始まりは、落語の実演から。演目は「ぶしよう猫」。初めて聞く生の落語に、会場には早くも笑いの輪が広がります。その後、手拭いや扇子といった小道具の使い方を練習。最後には、子どもたちが、自分で考えた芸名で高座に上がり、覚えたばかりの小断を披露しました。

秋晴れに恵まれた土曜日の昼下がり。文学館は、小さな落語家たちの笑い声であふれました。お時間〜！
参加者約二〇人



山椒家小粒さん(右)



生きがいが福岡21・北九州主催
「自分史による生きがいがさぎ公開講座」
平成19年10月20日



九州電力北九州支店主催
「みんなの作文・エッセイコンクール」
表彰式 平成19年12月2日



作曲家加藤さとるさんらによる演奏会
「音楽でつづる北九州文学散歩」
平成19年12月23日



詩のボクシング福岡大会実行委員会主催
「詩のボクシング 福岡大会予選」
平成19年10月28日



児童文学を読む会(月1回)
平成19年2月9日

北九州市及び北九州近郊を活動の拠点とし、文芸活動を行う団体を対象に、交流ステージ・ワークステーションの貸し出しをしています。
どちらも貸し出し料は無料です。詳しくは文学館事務室まで
093-571-1505
お問い合わせ下さい。

第十八回

北九州市自分史文学賞決まる

第十八回北九州市自分史文学賞は、全国及び海外から三七七編の応募があり、大賞「私の赤ちゃん」(鈴木政子)、佳作「幻の川」(桜田靖)、佳作「財産なんて—父母と私の戦後史」(高松直躬)北九州市特別賞「十坪の店の物語」(阿部照子)が決定しました。

第一回

北九州文学協会文学賞決まる

北九州文学協会が主催する「北九州文学協会文学賞」の受賞者が決まりました。最優秀作品は左記のとおり。表彰式は三月十六日に文学館で開催されます。○小説 大賞「メッセージ」千葉真由子(春日市)○詩 金賞「晩夏」中原敏子(小倉南区)○エッセイ 最優秀賞「何日君再来」天川悦子(小倉北区)

○俳句 寺井谷子 選特選「寝て起きてこの世短し稲の花」江島藤代(八幡西区) 岸原清行 選特選「音消えてをり日盛りの刃物店」江島藤代(八幡西区) 本田幸信 選特選「日焼け児の空 いっぱいの好奇心」伊藤久美子(戸畑区)

予告

企画展「神沢利子展(仮称)」

7月19日～9月15日

「くまの子ウーフ」、「ふらいばんじいさん」などの児童文学で知られる神沢利子さん。長年にわたり親しまれる、作品世界を紹介します。期間中には、神沢さんと水上平吉さん(児童文芸誌「小さい旗」主宰)による対談も。

親子で、友だち同士で、ウーフと一緒に夏休みを過ごしてみませんか。

神沢利子さん

児童文学者。一九二四年、福岡県戸畑市(現・北九州市)生まれ。幼少期を北海道で過ごす。二〇〇四年の北九州市民文化賞をはじめ、受賞多数。



神沢利子作/井上洋介絵「くまの子ウーフ」(ポプラ社 1969.6)

対談「自分史を語ろう」

館長佐木隆三が、対談を通してゲストの自分史に迫る「自分史を語ろう」を開催します。

第四回目のゲストは、二十八歳の若さで八幡製鐵所職員としてプラジルのウジミナス製鉄所設立に携わった、北九州市立大 学理事長の阿南惟正さんです。

応募方法は市政だより3月1日号に掲載します。

*日時 3月30日午後1時～2時30分

「与謝野寛・晶子展」記念

高橋睦郎さん講演会

*日時 4月20日(日) 午後1時30分～3時

*会場 北九州芸術劇場小劇場

*定員 二〇〇名

応募方法は市政だより3月15日号に掲載します。

文学講座

*日時 第四回特別企画展

「与謝野寛・晶子展」開催中の土曜日午後1時～2時30分

*会場 北九州市立文学館

*受講料 二〇〇〇円

*講師

4/26 國生雅子氏(福岡大学教授)

5/10 井上洋子氏(福岡国際大学教授)

5/17 島田裕子氏(歌人、梅光学院大学教授)

5/24 阿部誠文氏(歌人、俳人、九州女子大学教授)

5/31 近藤晋平氏(近代文学研究者)

応募方法は市政だより4月1日号に掲載します。

文学館文庫の出版

現在書店ではなかなか入手できなくなった北九州ゆかりの文庫の作品を出版し、販売しています。第一巻「火野葦平 岩下俊作 劉寒吉 集」、第二巻「林芙美子 短編集」に続いて、第三巻「杉田久女 句集」(昭和二十七年に刊行された「杉田

久女句集」を収録)を販売開始しました。第一巻、第二巻は定価千円(税込)。第三巻は定価七〇〇円(税込)。

資料寄贈者・受贈雑誌一覧

平成二十年三月現在

資料寄贈者 阿部誠文 荒井

千佐代 安間隆次 石太郎

市川市 伊藤比呂美 今村元

市 大川ゆかり 岡口茂子 柏

木恵美子 清田文武 近藤晋平

佐藤幸乃 添田裕吉 鷹取美

保子 谷喜美子 土田晶子 中

原澄子 中村哆佳子 花田宏

原田慶子 火野葦平資料の会

星野允伸 増田連 三鷹市 山

口公和 山本哲也 山本好昭

受贈雑誌 青嶺 あしへい

あん 色鳥 沖 牙 九州作家

九大日文 群炎 玄海 詩塔

自鳴鐘 驟雨 川柳あやめ 川

柳くろがね 川柳むらさき 天

籟通信 小さい旗 虹野 橋

文藝公論 (五十音順・敬称略)

発行 2008年3月1日
北九州市立文学館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
http://www.city.kitakyushu.jp

●開館時間
火～金 9:30～19:00(入館は18:30まで)
土・日・祝 9:30～18:00(入館は17:30まで)

●休館日
毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)
年末年始

●JR小倉駅より徒歩15分 ●JR西小倉駅より徒歩10分
●北九州市役所前バス停より徒歩2分 ●北九州市新市街大手町ランプより2分
●駐車場は文学館裏の各有料駐車場をご利用下さい